

馬の脚

芥川龍之介

青空文庫

この話の主人公は、忍野半三郎おしのはんざぶろうと言う男である。生憎あいにく大した男ではない。北京ペキンの三菱みつびしに勤めている三十前後の会社員である。半三郎は商科大学を卒業した後のち、二月目ふたつきめに北京へ来ることになった。同僚どうりようや上役うわやくの評判は格別善いいと言うほどではない。しかしまた悪いと言うほどでもない。まず平々凡々たることは半三郎の風采ふうさいの通りである。もう一つ次手ついでにつけ加えれば、半三郎の家庭生活の通りである。

半三郎は二年前にある令嬢と結婚した。令嬢の名前は常子つねこである。これも生憎あいにく恋愛結婚ではない。ある親戚の老人夫婦なこうに仲人どを頼んだ媒妁ばいしやく結婚である。常子は美人と言うほどではな

い。もつともまた醜婦しゆうふと言うほどでもない。ただまるまる肥ふとつた頬ほおにいつも微笑びしょうを浮かべている。奉天ほうてんから北京ペキンへ来る途中、寝台車の南京虫なんきんむしに螫さされた時のほかはいつも微笑を浮かべている。しかももう今は南京虫に二度と螫さされる心配はない。それはことう
××胡同の社宅の居間いまに蝙蝠こうもり印じるしの除虫菊じよちゆうぎくが二缶ふたかん、ちやんと具えつけてあるからである。

わたしは半三郎の家庭生活は平々凡々を極めていると言った。

実際その通りに違いない。彼はただ常子と一しよに飯を食ったり、蓄音機ちくおんきをかけたり、活動写真を見に行ったり、——あらゆる北ペ京キン中の会社員と変りのない生活を営いんでいる。しかし彼等の生活も運命の支配に漏もれる訣わけには行ゆかない。運命はある真昼の午後、

この平々凡々たる家庭生活の単調を一撃のもとにうち砕いた。三
 つびし
 菱会社員忍野半三郎は脳溢血のういつけつのために頓死とんししたのである。

半三郎はやはりその午後にも東単牌楼トンタヌピイロオの社の机にせつせと
 書類を調べていた。机を向かい合わせた同僚にも格別異状などは
 見えなかったそうである。が、一段落ついたと見え、巻煙草まきたばこを
 口へ唧くわえたまま、マツチをすろうとする拍子ひょうしに突然俯伏うつぶしにな
 って死んでしまった。いかにもあつけない死にかたである。しか
 し世間は幸いにも死にかたには余り批評をしない。批評をするの
 は生きただけである。半三郎もそのために格別非難を招かずに
 すんだ。いや、非難どころではない。上役うわやくや同僚は未亡人びぼうじん常
 子にいずれも深い同情を表した。ひよう

どうじん
同仁病院長山井博士の診断に従えば、半三郎の死因は脳のうい溢血である。が、半三郎自身は不幸にも脳溢血とは思っていない。第一死んだとも思っていない。ただいつか見たことのない事務室へ来たのに驚いている。――

事務室の窓かけは日の光の中にゆつくりと風に吹かれている。もつとも窓の外は何も見えない。事務室のまん中の大机には白いタアクワル大掛児を着た支那人シナじんが二人、差し向かいに帳簿を検らしべている。ひとりひとり一人はまだ二十前後はたちであろう。もう一人はやや黄ばみかけた、長い口髭くちひげをはやしている。

そのうちに二十前後の支那人は帳簿へペンを走らせながら、目も挙げずに彼へ話しかけた。

「アアル・ユウ・ミスタア・ヘンリイ・バレット・アアント・ユウ？」

半三郎はびつくりした。が、出来るだけ悠然ゆうぜんと北京官話ペキンかんわの返事をした。「我はこれ日本にっぽん三菱公司みつびしこうしの忍野半三郎」と答えたのである。

「おや、君は日本人ですか？」

やっと目を挙げた支那人はやはり驚いたようにこう言つた。年とつたもう一人の支那人も帳簿へ何か書きかけたまま、茫然ぼうぜんと半三郎を眺めている。

「どうしましょう？ 人違いですが。」

「困る。実に困る。第一革命かくめい以来一度もないことだ。」

年とつた支那人は怒おこつたと見え、ぶるぶる手のペンを震ふるわせている。

「とにかく早く返してやり給え。」

「君は——ええ、忍野君ですね。ちよつと待つて下さいよ。」
はたち

二十前後の支那人は新らたに厚い帳簿をひろげ、何か口の中に読みはじめた。が、その帳簿をとざしたと思うと、前よりも一層驚いたように年とつた支那人へ話しかけた。

「駄だ目めです。忍野半三郎君は三日みっかまへ前に死んでいます。」

「三日前に死んでいる？」

「しかも脚あしは腐くさっています。両りょうあし脚あしとも腿ももから腐くさっています。」

半三郎はもう一度びっくりした。彼等の問答に従えば、第一に

彼は死んでいる。第二に死後三日も経ている。第三に脚は腐っている。そんな莫迦^{ばか}げたことのあるはずはない。現に彼の脚はこの通り、——彼は脚を早めるが早いかな、思わずあつと大声を出した。大声を出したのも不思議ではない。折り目の正しい白ズボンに白靴^{ろくつ}をはいた彼の脚は窓からはい入る風のために二つとも斜めに靡^{なび}いている！ 彼はこう言う光景を見た時、ほとんど彼の目を信じなかった。が、両手にさわつて見ると、実際両脚とも、腿^{しり}から下は空気を掴むのと同じことである。半三郎はどうとう尻もちをついた。同時にまた脚は——と言うよりもズボンはちようどゴム風船のしなびたようにへなへなと床^{ゆか}の上へ下りた。

「よろしい。よろしい。どうにかして上げますから。」

年とつた支那人はこう言つた後、まだ余憤よふんの消えないように若い下役したやくへ話しかけた。

「これは君の責任だ。好いかな。君の責任だ。早速上申書じようしんしょを出さなければならん。そこでだ。そこでヘンリー・バレットは現在どこに行っているかね？」

「今調べたところによると、急に漢口ハンカオへ出かけたようです。」
「では漢口ハンカオへ電報を打ってヘンリー・バレットの脚を取り寄せよう。」

「いや、それは駄目でしょう。漢口から脚の来るうちには忍野君の胴どうが腐つてしまいます。」

「困る。実に困る。」

年とつた支那人は歎息した。何だか急に口髭さえ一層だらりと下つたようである。

「これは君の責任だ。早速上申書を出さなければならん。生憎乗客は残つていまいね？」

「ええ、一時間ばかり前に立つてしまいました。もつとも馬ならば一匹います。」

「どこの馬かね？」

「徳勝門外の馬市の馬です。今しがた死んだばかりです。」

「ら。」

「じゃその馬の脚をつけよう。馬の脚でもないよりは好い。ちよつと脚だけ持って来給え。」

はたち

二十前後の支那人は大机の前を離れると、すうつとどこかへ出て行つてしまった。半三郎は三度びつくりした。何でも今の話によると、馬の脚をつけられるらしい。馬の脚などになった日には大変である。彼は尻もちをついたまま、年とつた支那人に歎願した。

「もしもし、馬の脚だけは勘忍かんにんして下さい。わたしは馬は大だい嫌きらいなのです。どうか後生ごしょう一生のお願いですから、人間の脚をつけて下さい。ヘンリイ何なんとかの脚でもかまいません。少々くらい毛脛けずねでも人間の脚ならば我慢がまんしますから。」

年とつた支那人は氣の毒そうに半三郎を見下みおろしながら、何度も点頭てんとうを繰り返した。

「それはあるならばつけて上げます。しかし人間の脚はないので
すから。——まあ、災難とお諦めなさい。しかし馬の脚は丈夫
ですよ。時々蹄鉄を打ちかえれば、どんな山道でも平気ですよ。

……」

するともう若い下役は馬の脚を二本ぶら下げたなり、すうつ
とまたどこかからはいつて来た。ちょうどホテルの給仕などの長
靴を持って来るのと同じことである。半三郎は逃げようとした。
しかし両脚のない悲しさには容易に腰を上げることもし出来ない。
そのうちに下役は彼の側へ来ると、白靴や靴下を外し出した。
「それはいけない。馬の脚だけはよしてくれ給え。第一僕の承認
を経ずに僕の脚を修繕する法はない。……」

半三郎のこう喚わめいているうちに下役はズボンの右の穴へ馬の脚を一本さしこんだ。馬の脚は齒でもあるように右の腿ももへ食くらいついた。それから今度は左の穴へもう一本の脚をさしこんだ。これもまたかぷりと食らいついた。

「さあ、それでよろしい。」

二十前後の支那人は満足の微笑を浮かべながら、爪の長い両手をすり合せている。半三郎はぼんやり彼の脚を眺めた。するといつか白ズボンの先には太い栗毛くりげの馬の脚が二本、ちゃんともう蹄ひづめを並べている。――

半三郎はここまで覚えている。少くともその先はここまでのようにはつきりと記憶には残っていない。何だなんか二人の支那人と喧

嘩したようにも覚えてゐる。また嶮しい梯子段を転げ落ちたようにも覚えてゐる。が、どちらも確かではない。とにかく彼はえたいの知れない幻の中を彷徨した後やつと正気を恢復した時には××胡同の社宅に据えた寢棺の中に横たわつてゐた。のみならずちようと寢棺の前には若い本願寺派の布教師が一人、引導か何かを渡してゐた。

こう言う半三郎の復活の評判になつたのは勿論である。

「順天時報」はそのために大きい彼の写真を出したり、三段抜きの記事を掲げたりした。何でもこの記事に従えば、喪服を着た常子はふだんよりも一層にこにこしてゐたそうである。ある上役や同僚は無駄になつた香奠を会費に復活祝賀会を開いたそ

うである。もつとも山井博士の信用だけは危険に瀕したのに違いない。が、博士は悠然と葉巻の煙を輪に吹きながら、巧みに信用を恢復した。それは医学を超越する自然の神秘を力説したのである。つまり博士自身の信用の代りに医学の信用を抛棄したのである。

けれども当人の半三郎だけは復活祝賀会へ出席した時さえ、少しも浮いた顔を見せなかった。見せなかったのも勿論、不思議ではない。彼の脚は復活以来いつの間にか馬の脚に変っていたのである。指の代りに蹄のついた栗毛の馬の脚に変っていたのである。彼はこの脚を眺めるたびに何とも言われぬ情なさを感じた。万一この脚の見つかった日には会社も必ず半三郎を馘首してしまう

のに違いない。同僚どうりようも今後の交際は御免ごめんを蒙るのにきまつて

いる。常子も——おお、「弱きものよ汝の名は女なり」！常子も恐らくはこの例に洩もれず、馬の脚などになった男を御亭主ごていしゅに持つてはいないであろう。——半三郎はこう考えるたびに、どうしても彼の脚だけは隠さなければならぬと決心した。和服を廃したのもそのためである。長靴をはいたのもそのためである。浴室の窓や戸じまりを嚴重にしたのもそのためである。しかし彼はそれでもなお絶えず不安を感じていた。また不安を感じたのも無理ではなかったのに違いない。なぜと言えば、——

半三郎のまず警戒したのは同僚の疑惑を避けることである。これは彼の苦心の中でも比較的楽な方ほうだったかも知れない。が、彼

の日記によれば、やはりいつも多少の危険と闘^{たたか}わなければならなかったようである。

「七月×日 どうもあの若い支那人のやつは怪^けしからぬ脚をくつけたものである。俺^{おれ}の脚は両方とも蚤^{のみ}の巣窟^{そうくつ}と言つても好^いい。俺は今日も事務を執^とりながら、氣違^{あやまち}いになるくらい痒^{かゆ}い思いをした。とにかく当分は全力を挙げて蚤退治^{のみたいじ}の工夫^{くふう}をしなければならぬ。……

「八月×日 俺^{きょう}は今日マネエジャアの所へ商売のことを話しに行った。するとマネエジャアは話^{うち}の中にも絶えず鼻を鳴らしている。どうも俺の脚^{にお}の臭いは長靴の外にも発散するらしい。……

「九月×日 馬の脚を自由に制^{せいぎよ}御することは確かに馬術よりも

困難である。俺は今日午^{ひる}休^{やす}み前に急ぎの用を言いつけられたから、小走^{こばし}りに梯子段^{はしごだん}を走り下りた。誰でもこう言う瞬間^まには用のことしか思わぬものである。俺もそのためにいつの間にか馬の脚を忘れていたのであろう。あつと言う間に俺の脚は梯子段の七段目を踏み抜いてしまった。……

「十月×日 俺はだんだん馬の脚を自由に制御することを覚え出した。これもやつと体得して見ると、畢^{ひつきよう} 竟^あ腰の吊り合^あ一つである。が、今日は失敗した。もつとも今日の失敗は必ずしも俺の罪ばかりではない。俺は今朝九時前後^{けさ}に人力車^{じんりきしゃ}に乗って会社へ行^いった。すると車夫は十二銭の賃^{ちんせん}金をどうしても二十銭よこせと言う。おまけに俺をつかまえたなり、会社の門内へはいらせま

いとす。俺は大いに腹が立つたから、いきなり車夫を蹴飛ばしてやった。車夫の空中へ飛び上ったことはフット・ボオルかと思うくらいである。俺は勿論後悔した。同時にまた思わず噴飯した。とにかく脚を動かす時には一層細心に注意しなければならぬ。……」

しかし同僚を着するよりも常子の疑惑を避けることは遥かに困難に富んでいたらしい。半三郎は彼の日記の中に絶えずこの困難を痛嘆している。

「七月×日 俺の大敵は常子である。俺は文化生活の必要を楯に、たつた一つの日本間をもとうとう西洋間にしてしまった。こうすれば常子の目の前でも靴を脱がずにいられるからである。常子

は畳のなくなつたことを大いに不平に思っているらしい。が、靴くつ足袋つたびをはいているにもせよ、この脚で日本間を歩かせられるのとはうてい俺には不可能である。……

「九月×日 俺は今日道具屋にダブル・ベッドを売り払つた。このベッドを買つたのはある亜米利加人アメリカのオオクシヨンである。俺はあのオオクシヨンへ行つた帰りに租界そかいの並み木の下したを歩いて行つた。並み木の槐えんじゆは花盛りだつた。運河の水みず明あかりも美しかつた。しかし——今はそんなことに恋々れんれんとしている場合ではない。俺は昨夜ゆうべもう少しで常子の横腹けを蹴けるところだつた。……

「十一月×日 俺は今日洗濯物せんたくものを俺自身洗濯屋へ持つて行つた。もつとも出入りの洗濯屋ではない。東安市場とうあんしじやうの側の洗濯屋で

ある。これだけは今後も実行しなければならぬ。猿股さるまたやズボン下や靴下にはいつも馬の毛がくつついていいるから。……

「十二月×日 靴下の切れることは非常なものである。実は常子に知られぬように靴下代だいを工面くめんするだけでも並みたいいの苦労ではない。……

「二月×日 俺は勿論寝る時でも靴下やズボン下を脱いだことはない。その上常子に見られぬように脚の先を毛布もうふに隠してしまうのはいつも容易ならぬ冒険である。常子は昨夜寝る前に『あなたはおんとうに寒がりね。腰へも毛皮を巻いていらつしやるの?』と言った。ことによると俺の馬の脚も露見ろけんする時が来たのかも知れない。……」

半三郎はこのほかにも幾多の危険に遭遇した。それを一々枚まい挙いぎよするのはとうていわたしの堪たえるところではない。が、半三郎の日記の中でも最もわたしを驚かせたのは下に掲しもげる出来事である。

「二月×日 俺は今日午ひるやす休みに隆福寺の古本屋を覗ふるほんやきに行つた。古本屋の前の日だまりには馬車が一台止まっている。もつとも西洋の馬車ではない。藍あいいろ色の幌ほろを張つた支那馬車である。馭ぎよしや者も勿論馬車の上に休んでいたのに違ちがひない。が、俺は格別気にも止めずに古本屋の店へはいろいろとした。するとその途端とたんである。馭むち者は鞭を鳴らせながら、「スオ、スオ」と声をかけた。

「スオ、スオ」は馬を後あとにやる時に支那人の使う言葉である。馬

車はこの言葉の終らぬうちにがたがた後へ下り出した。^{さが}と同時に驚くまいことか！ 俺も古本屋を前に見たまま、^{ひとあし}一足ずつ後へ下り出した。この時の俺の心もちは恐怖と言うか、^{きようがく}驚愕と言うか、^{ひっぜつ}どうてい筆舌に尽すことは出来ない。俺は徒らに^{いたず}一足でも前へ出ようと努力しながら、しかも恐しい不可抗力のもとにやはり後へ下って行つた。そのうちに馭者の「スオオ」と言つたのはまだしも俺のためには幸福である。俺は馬車の止まる^{ひょうし}拍子にやつと後^{あと}ずさりをやめることが出来た。しかし不思議はそれだけではない。俺はほつと一息しながら、思わず馬車の方へ目を転じた。すると馬は——馬車を牽^ひいていた^{あしげ}葦毛の馬は何とも言われぬ^{いなな}嘶きかたをした。何とも言われぬ？——いや、何とも言われぬで

はない。俺はその疳^{かん}走^{ばし}った声の中に確かに馬の笑ったのを感じた。馬のみならず俺の喉^{のど}もとにも嘶きに似たものがこみ上げるのを感じた。この声を出しては大変である。俺は両耳へ手をやるが早い^{いっさん}か、一散^{いっさん}にそこを逃げ出してしまった。……」

けれども運命は半三郎のために最後の打撃を用意していた。と言^{おど}うのはほかでもない。三月の末のある午^{ひるごころ}頃、彼は突然彼の脚の躍^{おど}ったり跳^はねたりするのを発見したのである。なぜ彼の馬の脚はこの時急に騒^{さわ}ぎ出したか？ その疑問に答えるためには半三郎の日記を調べなければならぬ。が、不幸にも彼の日記はちやうど最後の打撃を受ける一日前に終っている。ただ前後の事情により、大体の推^{すい}測^{そく}は下^{くだ}せぬこともない。わたしは馬政^{ばせい}紀^き、馬^ば記^き、元^{げん}き

享療牛馬駝集、はくらくそうばきよう伯樂相馬經等の諸書に従い、彼の脚

の興奮したのはこう言うためだったと確信している。――

当日ははげ烈しい黄塵こうじんだった。黄塵とは蒙古もうこの春風しゅんぷうの北京ペキンへ

運んで来る砂埃すなほこりである。「順天時報じゅんてんじほう」の記事によれば、

当日の黄塵は十数年来未だ嘗見いまないところであり、「五歩の外に

正陽門せいようもんを仰ぐも、すでに門楼もんろうを見るべからず」と言うのであ

るから、よほど烈しかったのに違いない。然るに半三郎の馬の脚

は徳勝門外とくしょうもんがいの馬市うまいちの斃馬へいばについていた脚であり、そのまた

斃馬は明らかに張家口ちやうかこう、錦州きんしゅうを通じて来た蒙古産の庫倫クーロン

馬である。すると彼の馬の脚の蒙古の空気を感じるが早い、たちまち躍ったり跳ねたりし出したのはむしろ当然ではないであろ

うか？　かつまた当時は塞^{さい}外^{がい}の馬の必死に交尾^{こうび}を求めながら、
 縦^{じゅう}横^{おう}に駈^かけまわる時期である。して見れば彼の馬の脚がじつ
 としているのに忍びなかつたのも同情に価^{あた}いすると言わなければな
 らぬ。……

この解釈の是非^{ぜひ}はともかく、半三郎は当日会社^{かいしゃ}にいた時も、舞
 踏^{ぶた}か何かするように絶えず跳ねまわっていたそうである。また社
 宅へ帰る途中も、たつた三町ばかりの間に人力車^{じんりきしゃ}を七台踏みつ
 ぶしたそうである。最後に社宅へ帰つた後^{のち}も、——何^{なん}でも常子の
 話によれば、彼は犬のように喘^{あえ}ぎながら、よろよろ茶の間^まへはい
 つて来た。それからやつと長椅子^{ながいす}へかけると、あつけにとられた
 細君^{ほそぎ}に細引^{ほそびき}を持って来いと命令した。常子は勿論夫の容子^{ようす}に大

事件の起つたことを想像した。第一顔色も非常に悪い。のみならず苛^{いらだ}立たしさに堪えないように長靴^{ながぐつ}の脚を動かしている。彼女はそのためいつものように微笑^{びしょう}することも忘れたなり、一体細引を何にするつもりか、聞かしてくれと歎願した。しかし夫^{おつと}は苦しうに額^{ひたい}の汗を拭いながら、こう繰り返すばかりである。

「早くしてくれ。早く。——早くしないと、大変だから。」

常子はやむを得ず荷造りに使う細引を一束^{ひとたば}夫へ渡した。すると彼はその細引に長靴の両脚を縛^{しば}りはじめた。彼女の心に発狂と言ふ恐怖のきざしたのはこの時である。常子は夫を見つめたまま、震える声に山井博士の来診^{らいしん}を請^すうことを勧め出した。しかし彼は熱心に細引を脚へからげながら、どうしてもその勧めに従わな

い。

「あんな藪^{やぶ}医者に何がわかる？ あいつは泥棒だ！ 大詐偽師だ

！ それよりもお前、ここへ来て俺の体を抑^{おさ}えていてくれ。」

彼等は互に抱^だき合ったなり、じつと長椅子に坐っていた。北京^{ペキン}

を蔽^{おお}つた黄塵^{こうじん}はいよいよ烈しさを加えるのであろう。今は入り

日さえ窓の外に全然光と言う感じのしない、濁^{にご}つた朱^{しゆ}の色を漂^{ただよ}わ

せている。半三郎の脚はその間も勿論静かにしている訣^{わけ}ではない。

細引にぐるぐる括^{くく}られたまま、目に見えぬペダルを踏むようにや

はり絶えず動いている。常子は夫を励^{いた}わるように、また夫を励ま

すようにいろいろのことを話しかけた。

「あなた、あなた、どうしてそんなに震えていらつしやるんです

「？」

「何なんでもない。何でもないよ。」

「だってこんなに汗をかいて、——この夏は内地へ帰りましょうよ。ねえ、あなた、久しぶりに内地へ帰りましょうよ。」

「うん、内地へ帰ることにしよう。内地へ帰って暮らすことにしよう。」

五分、十分、二十分、——時はこう言う二人の上に遅い歩みを運んで行つた。常子は「順じゆん天てん時じ報ほう」の記者にこの時の彼女の心もちはちょうど鎖くさりに繋がれた囚しゆうじん人のようだったと話している。が、かれこれ三十分の後のち、畢ついに鎖くさりの断たれる時は来た。もつともそれは常子の所いわゆる謂鎖の断たれる時ではない。半三郎を家庭

へ縛りつけた人間の鎖の断たれる時である。濁った朱の色を透^すかせた窓は流れ風にでも煽^{あお}られたのか、突然がたがたと鳴り渡った。と同時に半三郎は何か大声を出すがい早い、三尺ばかり宙へ飛び上った。常子はその時細引のばらりと切れるのを見たそうである。半三郎は、——これは常子の話ではない。彼女は夫の飛び上るのを見たぎり、長椅^{ながいす}子の上に失神してしまった。しかし社宅の支那人のボオイはこう同じ記者に話している。——半三郎は何かに追われるように社宅の玄関へ躍^{おど}り出た。それからほんの一瞬間、玄関の先に佇^{たたず}んでいた。が、身震^{みふる}いを一つすると、ちようど馬^{いなな}の嘶^{いなな}きに似た、気味の悪い声を残しながら、往来を罩^こめた黄塵^{こうじん}の中へまっしぐらに走って行ってしまった。……

その後の半三郎はどうなったか？ それは今日でも疑問である。

もつとも「順天時報」の記者は当日の午後八時前後、黄塵に煙つ

た月明りの中に帽子をかぶらぬ男が一人、万里の長城を見る

のに名高い八達嶺下の鉄道線路を走って行つたことを報じてい

る。が、この記事は必ずしも確実な報道ではなかったらしい。現

にまた同じ新聞の記者はやはり午後八時前後、黄塵を沾した雨の

中に帽子をかぶらぬ男が一人、石人石馬の列をなした十三三

陵の大道を走って行つたことを報じている。すると半三郎は

××胡同の社宅の玄関を飛び出した後、全然どこへどうしたか、

判然しないと言わなければならぬ。

半三郎の失踪も彼の復活と同じように評判になつたのは

勿論である。しかし常子、マネエジャア、同僚、山井博士、「順天時報」の主筆等はいずれも彼の失踪をはつきよう発狂のためと解釈した。もつとも発狂のためと解釈するのは馬の脚のためと解釈するのよりも容易だったのに違いない。難を去つて易につくのは常に天下の公道である。この公道を代表する「順天時報」の主筆むだ牟多口氏は半三郎の失踪した翌日、その椽大の筆を揮つて下の社説ぐちしを公にした。——
 おおやけ

「三菱社員忍野半三郎氏は昨さくゆう夕五時十五分、突然発狂したるが如く、常子夫人の止とむるを聴きかず、单身いずこにか失踪したり。どうじん同仁病院長山井博士の説によれば、忍野氏は昨夏のうい脳溢血を患い、三日間人事不省じんじふせいなりしより、爾来多少精神に異常を呈せるも

のならんと言う。また常子夫人の発見したる忍野氏の日記に徴するも、氏は常に奇怪なる恐迫觀念を有したるが如し。然れども吾人の問わんと欲するは忍野氏の病名如何にあらず。常子夫人の夫たる忍野氏の責任如何にあり。

「それわが金甌きんおうむけつ無欠の国体は家族主義の上に立つものなり。家族主義の上に立つものとせば、一家の主人たる責任のいかに重大なるかは問うを待たず。この一家の主人にして妄みだりに発狂する権利ありや否や？ 吾人はかかる疑問の前に断乎だんことして否と答うるものなり。試みに天下の夫にして発狂する権利を得たりとせよ。彼等はことごとく家族を後あとに、あるいは道塗どうとに行吟こうぎんし、あるいは山沢さんたくに逍遙しょうようし、あるいはまた精神病院裡りに飽食ほうしょく暖衣だんいす

るの幸福を得べし。然れども世界に誇るべき二千年來の家族主義は土崩瓦解するを免れざるなり。語に曰、其罪を悪んで其人を悪まずと。吾人は素より忍野氏に酷ならんとするものにあらざるなり。然れども輕忽に発狂したる罪は鼓を鳴らして責めざるべからず。否、忍野氏の罪のみならんや。発狂禁止令を等閑に附せる歴代政府の失政をも天に替つて責めざるべからず。

「常子夫人の談によれば、夫人は少くとも一ケ年間、××胡同の社宅に止まり、忍野氏の帰るを待たんとするよし。吾人は貞淑なる夫人のために満腔の同情を表すると共に、賢明なる三菱当事者のために夫人の便宜を考慮するに吝かならざらんことを切望するものなり。……」

しかし少くとも常子だけは半年ばかりたつた後、この誤解に安んずることの出来ぬある新事実に遭遇した。それは北京の柳や槐も黄ばんだ葉を落とすはじめる十月のある薄暮である。常子は茶の間の長椅子にぼんやり追憶に沈んでいた。彼女の唇はもう今では永遠の微笑を浮かべていない。彼女の頬もいつの間にかすっかり肉を失っている。彼女は失踪した夫のことだの、売り払ってしまったダブル・ベッドのことだの、南京虫のことだのを考えつづけた。すると誰かためらい勝ちに社宅の玄関のベルを押した。彼女はそれでも気にせず、ボオイの取り次ぎに任かせて措いた。が、ボオイはどこへ行つたか、容易に姿を現さない。ベルはその内にもう一度鳴った。常子はやっと長椅子を離れ、静かに玄関へ

歩いて行った。

落ち葉の散らばった玄関には帽子ぼうしをかぶらぬ男が一人、薄明うすあかりの中に佇たたずんでいる。帽子を、——いや、帽子をかぶらぬばかりではない。男は確かに砂埃すなほこりにまみれたぼろぼろの上衣うわぎを着用している。常子はこの男の姿にほとんど恐怖に近いものを感じた。

「何か御用でございますか？」

男は何とも返事をせずに髪の毛の長い頭を垂れている。常子はその姿を透すかして見ながら、もう一度恐る恐る繰り返した。

「何か、……何か御用でございますか？」

男はやつと頭もたを擡もちげた。

「常子、……」

それはたった一ことだった。しかしちょうど月光のようにこの男を、——この男の正体を見る見る明らかにする一ことだった。常子は息を呑んだまま、しばらくは声を失ったように男の顔を見つめつづけた。男は髭を伸ばした上、別人のように寡れている。が、彼女を見ている瞳は確かに待ちに待った瞳だった。

「あなた！」

常子はこう叫びながら、夫の胸へ縋ろうとした。けれども一足出すが早いか、熱鉄か何かを踏んだようにたちまちまた後ろへ飛びすさった。夫は破れたズボンの下に毛だらけの馬の脚を露している。薄明りの中にも毛色の見える栗毛の馬の脚を露している。

「あなた！」

常子はこの馬の脚に名^{めいじよう}状の出来ぬ嫌悪^{けんお}を感じた。しかし今を逸^{いつ}したが最後、二度と夫に会われぬことを感じた。夫はやはり悲しそうに彼女の顔を眺めている。常子はもう一度夫の胸へ彼女の体を投げかけようとした。が、嫌悪はもう一度彼女の勇気を圧倒した。

「あなた！」

彼女が三度目にこう言つた時、夫はくるりと背を向けたと思うと、静かに玄関をおりて行つた。常子は最後の勇気を振り、必死に夫へ追ひ継^{すが}ろうとした。が、まだ一足^{ひとあし}も出さぬうちに彼女の耳にはいったのは憂^{かつかつ}々と蹄^{ひづめ}の鳴る音である。常子は青い顔をし

たまま、呼びとめる勇氣も失つたようにじつと夫の後ろ姿を見つめた。それから、——玄関の落ち葉の中に昏々と正氣を失つてしまった。……

常子はこの事件以来、夫の日記を信ずるようになった。しかしマネエジャア、同僚、山井博士、牟多口氏等の人びとは未だに忍野半三郎の馬の脚になつたことを信じていない。のみならず常子の馬の脚を見たのも幻覺に陥つたことと信じている。わたしは北京滞在中、山井博士や牟多口氏に会い、たびたびその妄を破ろうとした。が、いつも反対の嘲笑を受けるばかりだった。その後も、——いや、最近には小説家岡田三郎氏も誰かからこの話を聞いたと見え、どうも馬の脚になつたことは信ぜられぬと

言う手紙をよこした。岡田氏はもし事実とすれば、「多分馬の前
えあし脚をとってつけたものと思いますが、スペイン速歩そくほとか言う妙
 技を演じ得る逸いつそく足ならば、前脚で物を蹴るくらいの変り芸もす
 るか知れず、それとても湯浅少佐ゆあさしょうさあたりが乗るのでなければ、
 果して馬自身でやり了おおせるかどうか、疑問に思われます」と言う
 のである。わたしも勿論その点には多少の疑惑を抱かざるを得な
 い。けれどもそれだけの理由のために半三郎の日記ばかりか、常
 子の話をも否定するのはいささか早計そうけいに過ぎないであろうか？
 現にわたしの調べたところによれば、彼の復活を報じた「順じゆん
 天時報てんじほう」は同じ面の二三段下にこう言う記事をも掲げている。

「美華禁酒会長ヘンリイ・バレット氏は京漢鐵道の汽車中に頓とびかきんしゅ死んししたり。同氏は藥くすり罎びんを手に死しいたるより、自殺の疑いを生ぜしが、罎中の水藥すいやくは分析ぶんせきの結果、アルコール類と判明したるよし。」

（大正十四年一月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyaana

校正：かとうかおり

1999年1月5日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

馬の脚

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>